

松 風

福島県公立学校退職校長会

二本松大会開催…………… 1
 講演…………… 2
 体験発表 ①石川支部 小針 良仁…… 3
 ②耶麻支部 神田 優子…… 4
 ③いわき支部 矢内 金五…… 5
 大会風景・大会宣言…………… 6

〒960-8107 福島市浜田町4-16 富士ビル2階
 TEL (024) 534-5411
 FAX (024) 531-1195

創立六十年記念第五十八回福島県公立学校退職校長会

二本松大会 開催

創立六十年記念第五十八回福島県公立学校退職校長会福島大会は、令和六年六月十二日(水)、二本松市の「二本松御苑」において開催された。昨年度に続き、通常開催となり、創立六十年記念にふさわしい大会となった。

大会会長あいさつ

福士 寛樹



本日、創立六十年記念第五十八回福島県公立学校退職校長会二本松大会が盛大に開催できることは、この上ない喜びである。中央教育審議会では、採用試験の前倒し実施に加え、小学校における教科担任制を三・四年から実施することや教職調整額を四%から十%以上に増額することを提言した。本県では小学校の教員採用試験の倍率が一・二倍に低下していることに危機感を感じ、本会の重点項の一つに福島大学

や県教委と連携した教員の魅力発信を位置づけた。先日福島大学の二年生約二百名に「教員の魅力と本県教育の現状」という内容で講義を行った。また、県教委では第七次福島県総合教育計画の中で、「福島ならではの教育」を推進し、「学びの革新」と「学校の在り方の革新」を掲げた。多忙を極める教育現場への支援に今こそ組織をあげて努めていきたい。

さて、能登半島地震の義援金の協力、感謝申し上げます。先日、石川県退職校長会会長にお届けした。結びに、本大会の企画・準備等を進められた実行委員長さんをはじめ、安達支部や関係者の皆さまに御礼と感謝を申し上げ、あいさつとする。

本日、各支部代表等の参加を頂き、第五十八回県大会を実施できますことに感謝申し上げます。私達を取り巻く環境は、退職年齢が六十五歳になることに併せ悪化が懸念されるが、私達は常に社会の変化に対応し、理想に向けて行動してきた。実行委員会では、『研究協

大会実行委員長あいさつ

伊藤 末吉



議、記念講演、交流』の3Kの充実を目指して、対応することを申し合わせ準備してきた。研究協議では、石川・耶麻・いわき三地区代表の発表に誠意をもって協力する。大山采子氏の講演では、父親の大山忠作氏への思いと采子氏ご本人の技術を楽しむ。交流会では、各支部のよさや課題を再確認し、活動のエネルギーにして頂きたい。

今大会では、安達支部のフォトクラブの作品展示を試みた。今大会が、退職後の生活を輝かせ、生きがいづくりの機会になることを願い、あいさつとする。(要旨)

二本松大会 順序

- I 開会式 10:30~11:10
 - 1 開式のことば
 - 2 国歌斉唱
 - 3 会長あいさつ
 - 4 大会実行委員長あいさつ
 - 5 来賓あいさつ
 - (1) 福島県教育委員会教育長 様
 - (2) 二本松市長 様
 - 6 来賓紹介・祝電披露
 - 7 閉式のことば
- II 講演 11:20~12:20

「生きることは描くこと、生きることは演じること」
 ~大山忠作とわたし~ 大山 采子 氏
- III 昼食・懇談 (VTR視聴) 12:20~13:10
- IV 体験発表 13:10~14:25
 - 1 石川支部 小針 良仁
 - 2 耶麻支部 神田 優子
 - 3 いわき支部 矢内 金五
- V 大会宣言 14:35~14:45
- VI 閉会式 14:45~14:55
 - 1 開式のことば
 - 2 次期開催支部代表あいさつ
 - 3 閉式のことば

講演

『生きる』は描く』『生きる』は演じる
大山忠作とわたし

大山 采子氏



1 父の生い立ち

父、大山忠作は二本松市出身で、生家は染物問屋を営んでいた。田舎の染物屋で野良着を藍で染めたり、婚礼の時は友禅を染めたり、何でも屋だった。ただ、着物の見本がたくさんあり「絵描きになる土壌になったのかな」と父が話すことがあった。また父は、成績も優秀で神童と呼ばれていたようだ。

二男だった父は、二本松の小学校卒業後、東京の親戚の養子になる。当時の日本は軍国主義の時代、養父は優秀な父を軍人にした

と士官学校を受けさせる。だが父は絵描きになりたいとの思いがあり軍人になる意思はなく、試験では問題用紙を裏返しそのまま終了まで絵を描いていたと話していた。試験に落ちた父は、養父に内緒で難関の美術学校(現東京芸大)を受けた。

絵の勉強もしない、裕福な家庭でもない父が、すんなりストリートで合格したことは驚きなのだが、養父の逆鱗に触れ、養子を解消され家を出されてしまう。その後は横浜に住む父の兄に世話になり美校に通ったのではないかと思われる。

2 九死に一生を得て 帰国

学徒動員、父も(映像にある)神宮外苑の行進に参加し、特攻隊として出兵した。いよいよ戦況が怪しくなり父の隊はフィリピンに向かった。しかし、前の隊

が、身動きが取れない状況で父たちは三艘の船で台湾へ退却する。途中、敵襲に遭い最後尾の船が轟沈。父が乗った船も操行不能になり沈没。父は海面の木っ端にしがみついた。目の前にはマニラ湾の美しい夕日。ガツ、ガツ、ガツと沈んでいくのを眺め「あの夕日が沈んだら自分も」と覚悟していた。その時、引き返してきた一艘目の船が現れ、父は救助された。

終戦後、内地に帰ると、GHQの方針ですでに第一回日展が行われていた。父は、これから自分は絵だけを描いて生きようと堅く心に誓い、半年後の第二回日展から出展し、以後落選知らずで、追うごとに画壇を上っていくことになる。

3 父の後ろ姿を見て 成長した幼少期の私

父は遠縁に当たる母と結婚し私が生まれた。父は無口で画室にこもって絵を描くことを何よりも好み、夏休みでも二本松に帰省することはほぼなかった。私は父から叱られたり勉強しな

4 生涯をかけて「演じる」

さいと言われたりすることはなく、ただ「学校を休むな」とだけは言われ、決めたことをやり通すよう教えられた。通知票を見せると「上等」の一言だけ。普通の家とは違っていると感じていたが、冷たいとか愛されていないと感じたことはなく、母が父を尊敬するように私も父を尊敬していた。

私はある写真をきっかけにグラビアやテレビの仕事が入り、シンデレラガールと言われ、菅原文太主演番組で女優デビューした。多くの番組に出演する中、私を厳しく育ててくれた母ががんで余命一、二か月と診断され、全ての仕事をキャンセルし、母のそばで母がしたいということと一緒にやった。その後母との半年間は、神様がくれた本当に宝物のような親子でいられた大事な時間になった。

母が他界し仕事のことを考えたが、ふと気が付くとまだ現役の父がいる。女優であるよりも父のサポート

をする方が、文化的に価値があると思ひ、仕事に戻ることはなかった。非凡な才能に恵まれた父の生涯は「生きることは描くこと」だった。では私にとって生きることは何だろう。日々思うのは、人様の役に立っているか、明るい態度で接しているか、不愉快な顔をしていないかを心掛けている。これが私の演じていることである。

仏教に「顔施」という言葉があるが、私はいつもにこやかにいるか、人によって態度を変えていないかなどを意識し演じている。繰り返し演じることでいつか身に付き、地になると信じて。「生きることは演じてこと」、私は生涯をかけて演じ、その名優になりたいと思っている。

(安達支部 遠藤春光)



体験発表①

石川町歴史民俗資料館 移転オープンにあたって

石川支部
小針 良仁



はじめに

石川町は日本三大ペグマタイト産地と自由民権発祥の地として有名な所である。そして、わたしの今の仕事は先人が残した資料や鉱物等の整理をしている。

1 旧石川町立歴史民俗資料館の実態と移転理由

開館から築五十年（令和六年現在）が経過して、老朽化とともに年々収蔵する歴史資料や鉱物標本等が増加し展示スペースや収蔵庫に空きがない状況になったことが主な理由である。

2 新石川町立歴史民俗資料館移設事業費と工事経過について



新石川町立歴史民俗資料館外観

移転事業費は六億千六百万円で国の空き家再生事業と過疎対策費を活用している。

令和三年三月に土地と建物を購入し、新資料館の設計とアスベストの除去後、館外部と内部の工事を行って、令和六年四月二十七日にオープンした。

3 新しい資料館の展示構成について

常設展示室内の工事を行っている間に私は、歴史民俗資料館検討委員会の一人として参加し、基本構想・基本計画を策定して常設展示室のコンセプトを石川町の歴史には、常に鉱物との関わりがあったということ、鉱物を展示室の中心にもっていき、石川町の通史と鉱物との関わりを対比できるようにしていく。つまり、石川町の歴史や文化を生み出した背景には、豊富な鉱物資源の存在があったことを感じてもらえるような展示にしていきたいことにした。

常設展示室の展示構成の立案は、職員八名（歴史四名、鉱物四名）と展示業務委託業者で検討し、五つのゾーンに分けて立案・展示していくことにした。
①石のまちシアターゾーン
歴史民俗資料館の見学に

あたっての導入映像で「大地と人々が織りなす物語」を放映している。また、県の天然記念物になっているペグマタイト鉱物二十六種類五十個を展示し、ペグマタイトの向き方についての解説図を展示している。



常設展示室（歴史ゾーン）

②石川町の歴史ゾーン

原始時代から近代までの石川町の歴史を時系列に展示している。

③石川の大地と岩石・鉱物ゾーン

石川町の地質や鉱山の歴史、石にまつわる戦争と平和について展示している。

④石川町の歴史に残る人々ゾーン

自由民権運動発祥の地として河野広中、吉田光一らの関わりを解説している。石川の鉱物を世に広めた人物として森嘉種、三森たか子、飯盛里安を紹介し、石川の石が世界的に有名な

なった経緯について解説展示している。

⑤石川町の民俗ゾーン

石川町の生活（衣・食・住）や産業（養蚕・馬産・炭焼）信仰（祈り・祭り・行事）を紹介している。

4 館内の便利説明案内アイテム

①床グラフィックガイド
マップ：エントランス床面に「石川町の文化財ガイドマップ」を設置した。

②VR展示：和久観音山鉱山（県指定天然記念物）のVR体験ができる。

③自立走行型ロボットによる展示案内：職員が手薄になっても常時解説が可能になった。

5 今後の課題

①入館者をいかに増やすか：情報発信の工夫と企画展開催を実施していきたい。

②施設管理費および施設改修費：図書閲覧室の改修工事が行われる予定である。

③岩石・鉱物の資料台帳、文化財資料台帳などのデジタル化を進めていきたい。

体験発表②

「人づくりの指針」への関わりを通して

耶麻支部

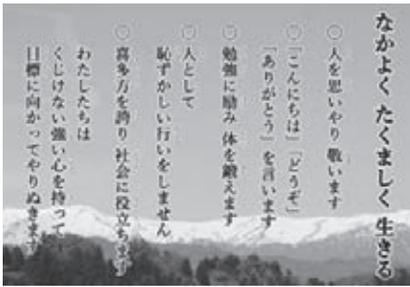
神田 優子



「人づくりの指針」は、喜多方市における人間性を育む考え方である。策定の段階から長年にわたって退職校長会の沢山の先輩方が関わってきているのを引き継ぎ、現在私も関わっている。

1 はじめに

喜多方市は平成十八年の合併からスタンダードな教えの共有化が必要との声が出てきた。また同年に教育基本法の改正があり「家庭教育」や「伝統の継承」などが加えられた。さらには、策定中の平成二十三年には、東日本大震災が発生し、助け合いの重要性が叫ばれた。これらを背景に、子ども向けの指針「なかよくたくましく生きる」と大人向けの指針「未来を拓く喜多



なかよくたくましく生きる

方人」が策定された。「検討委員会」の中に退職校長二人が委員として加わり、委員長も務めた。審議にあたっては、市内九団体からの意見を聞きボトムアップ形式を大切にされた。その中には喜多方に関わる先人達の教えを普及する三つの団体も含まれていて、これらの団体にも退職校長が入っている。最初子ども向けを策定し、その内容を受けて大人向けを策定した。今から十三年前のことである。

2 根底を流れる教え

○中江藤樹の藤樹学の教え 江戸時代の藤樹学は、陽明学の流れをくんだ学問で「心の学問」と言われている。自分の美しい心を磨いて行動することを中心とする。喜多方の有志は京都まで行き藤樹学を学び、その教えの勉強会が約二二十年間にわたり続いてきた。

○瓜生岩子の教え

幕末に生まれた瓜生岩子は社会福祉の母と言われ、戊辰戦争では、敵味方の別なく救護活動を行い、日本のナイチンゲールとも呼ば

れている。慈悲の心で貧しい子ども達と母親の救済教育に尽力した。

○蓮沼門三の教え

明治初期に生まれた蓮沼門三は、社会教育の先駆者と言われる。東京府師範学校在学中に寄宿舎での美化活動をはじめ、全ての人が幸せになる明るい社会づくりを目指して「修養団」を設立した。

これらの先人達の教えが、指針の中の一つ一つの言葉につながっている。

3 実践の様子

○人づくりの指針推進会議 退職校長二名が委員として加わり、様々な意見を出している。私もこの会議の委員として四年目になる。

意見として出してきた主なものは広報の工夫と子ども用リーフレットのの見直しである。指針の中から子ども達が自分の目当てを立てて実行することが重要だとの思いから、書き込み式のリーフレットに改訂した。

○学校・公民館等での推進：市内小学校の共通実

践として友達の良さを見つけ合う「なかたくタイム」を行っている。また、副読本「先人からの贈り物」や啓発DVDを活用している。公民館では、退職校長が講師となり、人づくりの指針の講座を開催している。



3人の教えの副読本

4 未来に向けて

策定から十年以上が過ぎ、これからも大人、特に家庭への周知を継続していくことが大切だと考えている。また、子ども一人一人が目標を設定し実践し自己評価することの繰り返しにより、自尊感情や自己有感の育成を続けることが大切だと考えている。それが、最終的に指針の最後の言葉「くじけない強い心を持つて目標に向かってやり抜きます」につながると思う。これからもいろいろな場と機会を捉えて関わりを続けていきたい。



体験発表③

富士山の見える 阿武隈の山々

いわき支部
矢内 金五



はじめに

退職後、植田公民館に社会教育指導員として勤務していた時に、いわき市勿来関文学歴史館の吉田館長より講演の依頼があり、「富士山の見える阿武隈の山々」のテーマで講演を行った。当日は定員三十名のところに五十名を超す参加があった。遠くは東京や白河から来られた方もあり、会場の吹風殿の板張りの間では収容しきれず、一部の聴講者にはその脇の畳の間に座って聴いていただいた。



勿来関文学歴史館での講演の様子

今回は、沢いわき支部長の推薦で体験発表をした。会場では村田幹事長の協力を受け、映像で説明した。

1 富士山の見える北限の山「日山」(天王山)



日山の展望台から撮影された富士山

① 平成十二年一月十日に山頂の展望台から撮影され、富士山からの方向と距離は北東二百九十九kmである。

2 富士山の見える山「三株山」

① いわき市と古殿町の境にある山で、展望台に登ると富士山が見えることを示す掲示板があり、富士山の見える方向などを確認できる。

② 三株山へ行くには、いわき市田人町貝泊から古殿町に入り、峠を下る所の三差路を右折する。道なりに進むと急に視界が広がり草原が目に入る。山頂入り口の看板のあるところで左折すると目的地に到着できる。



三株山の展望台から撮影された富士山

③ 最近、近くの羽山(麓山)で富士山が撮影され、富士山の見える最北の山は、日山から羽山へ移動した。

りは三株山から見た方が美しい。
おわりに



箱根から見た富士山

阿武隈の山々を紹介したが、世界遺産に登録された富士山に比べればスタイルや若さの面で人をひきつける力が弱いようである。

しかし、阿武隈高地の一部は長い地球の歴史の中で一度も海底になったことのない場所がある。そのため、地球の「生き証人」として日本列島の生い立ちを探るヒントを提供してくれている。これまでも阿武隈の魅力に惹かれ、河川争奪やペグマタイトなどの研究から世界で活躍する人材を送り出してきた。まさに、阿武隈は若い科学者を育てる「母なる大地」である。



参加者の皆さん



開会式

大会風景



交流風景



体験発表



講演

大会宣言

私たち福島県公立学校退職校長会は、創立以来、先人の教育に寄せる熱い思いと献身的な取組を継承して半世紀にわたる歴史を重ねて来た。この間、自らの生活の向上、地域社会の伸展、そして本県教育振興への寄与と発展のために様々な取組を行ってきた。

しかしながら、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故によって、私たちの生活は大きく様変わりし、13年が経過した。被災地区においては現在もなお原発事故の収束と復興・創生への遠い道のりが続いている。また、新型コロナウイルス感染症が世界的に猛威を振るい、本県においても憂慮すべき事態が続いている。

このような中において、私たちは、本会の存在意義を改めて見つめ直し「双葉の灯を消さない」よう、組織のもつ力を活かすとともに、これまで積み重ねてきた会員一人一人の経験と知恵を活かし、ふるさと復興・創生の支援活動を進めてきた。また、感染予防を徹底しながら本会並びに各支部活動を展開しているところである。

ここに、創立60年記念第58回二本松大会の開催にあたり、下記事項の実現に向けて決意を新たにすものである。

記

- 一 ふるさと・ふくしまの復興・創生に向けて、地域社会の活動に積極的に協力し、一人一人が生きがいをもって生活することができるよう努める。
- 一 さらなる魅力ある会を目指すとともに、本会ホームページ等の情報をもとに、相互に支部活動や地域社会貢献活動を充実させ、会員同士のふれ合いや支え合いを一層深めるよう努める。
- 一 本県の未来を担う子どもたちの豊かな心とたくましく生きる力を育むための教育環境の整備が図られるよう、教育機関や関係諸団体と連携を密にし、会員の経験を活かした支援活動の実践・充実に努める。
- 一 退職後の生活の再建・安定のために、年金生活が保障され、保険・医療・福祉等の制度がより充実されるよう、関係団体との連携を図りながら要望活動の強化に努める。
- 一 ガイドラインに基づき、感染症の予防対策を徹底する。併せて健康長寿を目指す。

令和6年6月12日

創立60年記念 第58回福島県公立学校退職校長会二本松大会